

2018年
3月1日
No. 107
隔月1回発行

特定非営利活動法人
レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク会報

ひきこもり



イラスト 高津 達弘

Index

- 2ページ ひきこもり支援にとって必要な居場所のチカラ
帯広市で不登校を考える集い
- 3ページ 辛さは人と比べなくてもよい～若手当事者の貴重な発題
扉を開けて～ルポ ひきこもり 共同通信社取材記事掲載
- 4ページ 「ひきこもりサテライト・カフェ in 小樽」 大橋伸和氏が語る
- 5ページ 第2回ひきこもりライフプラン学習会 講演採録
- 6ページ 旭川・こころのピアサポートフォーラム開催
- 7ページ 当事者手記「水鏡に、つゆ玉ひとつ」⑤
- 8ページ こちら事務局／編集後記

会報は、公益財団法人 北海道地域活動振興協会・平成29年度ボランティア活動支援事業助成金により作成されています。

ひきこもり支援にとって必要な居場所のチカラ〜当事者活動の現場から

小樽精神保健協会主催、市民のためのこころの健康セミナー「ひきこもり支援にとって必要な居場所のチカラ〜当事者活動の現場から」が11月30日小樽経済センター・ホールで開催された。会場には約30名の参加者が詰めかけ当NPOの活動について語る田中敦理事長の話に耳を傾けた。

田中理事長は厚生労働省が定義する支援と評価に関するガイドラインをベースに解説し「ひきこもりになったこと」は悪いことではなく「ひきこもり続けること」への社会的不利益に課題があると述べ、当NPOで調査したデータをもとに本人の年齢・学歴、無職の期間及び社会交流状況などひきこもりを取り巻く環境について説明した。

ひきこもりが高年齢化する背景には、就労経験を持つひきこもりが拡大し誰もがひきこもる社会になったことや、中高年ひきこもり当事者の自分は何をしたいのかがわからないという方向感覚の弱さ、人並には働きたいが自分を偽ってまで働きたくないというせめぎ合いの中でもがいている実態があると指摘し「自己達成感が不消化で過去の挫折体験を抱える中高年ひきこもり当事者は徹底した自己排除に苦しんでいるため、自尊心や誇りを傷つけない支援が求められる」と訴えた。

続いて50代のひきこもり当事者として話題提供した吉川修司理事は「当事者が発言する

とお涙頂戴的な見方をされるが、私はそんな発言はしたくない」と力強く意思を示したうえで50歳を迎えた心境を「あまりにも一般生活者と違う生活を続けてきたため、自分の足で人生を支えている感覚がない。しかしひきこもる生活が悪いとは思えない。人と交流すること以上に一人で行うことの方が自分を保てると思う」と心情を語り「就労一辺倒の支援だけではなく、ひきこもりながら自立した生活が送れるような支援も必要ではないか」と持論を述べた。

後半、田中理事長は「日々の生活費、交通費などの経済保障が心の余裕をつくり次へのステップをつくりだす」と述べ、孤立による精神保健上の課題もあるため、適度に人と交流できるような環境づくりは必要であることから居場所の必要性を提示し当NPOの当事者会での活動や小樽で始まった「ひきこもりサテライト・カフェ in 小樽」での様子を紹介、地域で孤立することなく支え合える場づくりの必要性を強調した。

ご寄付
ありがとうございます

野村俊幸（カナリア基金）様
3万円

団体活動を円滑にすすめていくために活用していきます。

帯広市で不登校を考える集い
〜思い出話に花が咲く〜

12月16日土曜日、不登校・登校拒否と向き合う親の会「はるにれの会」主催第14回不登校を考えるつどい（写真）に招かれ講演をしました。今から17年前にこのつどいの前身にあたるフォーラムに参加した思い出話に花が咲き、それぞれの子どもたちの成長を共有しました。十勝帯広の地で20年以上にわたり活動を続ける「はるにれの会」のさらなる発展を期待します。（田中敦）



8ページのイラストについて

タイトルを作者の小松英行さんに尋ねたところ「無題」と答えました。見る人それぞれの印象があるでしょう。ある人には花びらにも見え、ある人には宇宙（コスモス）にも思えるかもしれません。自由に想像してみるのも楽しいのですね。

辛さは人と比べなくてもよい
若手当事者の貴重な発題

2月11日祝日、発達障害の親たちへのランチ会番外編が北海道高等学校教職員センター4階会議室で開催され多くの市民が参加した。今回の企画は、「2018札幌若者たち」とのり次代を担う二本松一将氏が中心となり若手二名による貴重な発題があった。

まず、深堀まなか氏の「『私』という人生—これまでとこれから」では父親の突然の離職から音信不通となり生活保護での暮らしとなった生い立ち、そして中学校から今日までに至る幅広い社会活動を紹介した。この中でとくに筆者が印象に残ったのが2015年6月に発足した公益財団法人あすのば主催の合宿形式の全国イベントの場で生活保護世帯の子どもや児童福祉施設の子どもなどが集まり自分の体験をシェアする体験活動である。そこには東日本大震災のショックから精神科の隔離病棟で生活を強いられた人や高卒後6年間のひきこもり経験を踏んで27歳で大学に進学した人などが参加しており、そうした人たちとの出会いから自分の家でお金がないということが、すこくちっぽけなことと思え、辛さは人と比べなくてもよい。

自分が辛いと思ったら辛いんだとい

うことを学べたことが自分の辛さを真正面から受容することにつながったと語られ、ピアが織りなす力をそこに見出すことができた。

また続く小学6年生から不登校経験を有する木村将人氏の「私と不登校について」では、自分の生活を振り返りながら今日の活動を振り返り、不登校が改めて本人だけではなく親も悩みを抱えることが多いことから、木村氏が親の会のシステム又理論に関心を寄せ、その情報やネットワーク構築に込める思いを感じ取れるよい内容であった。また木村氏は不登校を心の糸が切れる様子であることから風の糸が切れることに喩えて表現した。風は自身で、風が上がっている状態を登校状態だととらえ、風は風（ここでは周囲の環境や働きかけ）を受けて安定した形で上がっていると述べた。そのうえで風を引く行為自体が一種の頑張り、無理のない範囲で引くと風はうまく上がっていくが強く引きすぎると糸は切れてしまう。加えて周囲の風は予告なしに変化し不安定になりそこで頑張りすぎると糸が切れて落ちてしまうその結果の一つが不登校である、という説明は個人と環境を視野に入れるソーシャルワークを考えるうえでも示唆に富むものであった。

(田中 敦)

「扉を開けて」ルポ ひきこもり
共同通信社取材記事が掲載



2017年12月14日付山陰中央新報

共同通信社（東京）が「扉を開けてルポひきこもり第4部再起」の連載が2017年12月東北・山陰地方ほか一部地域で配信された。

記事には、空白期間を解消するため一念発起してアルバイトに就くが、長く社会に出ていない「浦島太郎」状態で、周囲から罵倒される日々を送った男性のほか、ひきこりの現状から少しずつ再起する様子が掲載。中高年層のひきこもり当事者にもクローズアップした連載5回〜7回には当NPOに取材した内容が掲載された。インターネットネットワークを軸にした

在宅ワークを、当NPOの吉川修司理事と札幌市内で若者とともに中間的な

労働をすすめるアイデア企画代表の屋代育夫氏と協力して試行的に実践。屋代氏は「自分も脱サラをして自由に生きてきた。社会に相入れなくてもそれぞれ別の『宇宙』があってもよい」と語り、生きづらさを抱えた人たちと歩み寄りながら新しい働き方を目指す。また田中敦理事長は実践を通して「小さくても一人ひとりが役割を担うことで自分の存在を実感できる」と評価した。

記事では吉川理事の過去にも触れ、アルバイト先でのいじめにも似た言葉の暴力に耐えきれず辞めたあと、40歳を目前にして出向いた地域若者サポートステーションでは、就労という「枠」にはめられることへの拒否反応があったこと。当NPOに受け入れられ、当事者と手紙で文通することで得た自分の役割となり「ひきこもりの期間は次へのステップへの助走段階ととらえてほしい」と文通相手へ回答したことが掲載され、50歳という年齢に達し、NPO活動を中心にできることをしているが、先が見えないわだかまりを抱えて生きている姿が掲載された。「自分は何者なのか」この間に答えが出る日はくるのだろうか。

配信記事は共同通信ホームページからも閲覧可能。

<https://www.47news.jp/national/tobira>

ひきこもりサテライト・カフェ in 小樽

ひきこもりから社会へ～場面緘黙当事者・大橋伸和さんが語る

2017年12月20日水曜日「ひきこもりサテライト・カフェ in 小樽③」を小樽市総合福祉センター4階和室で開催、当事者や家族、支援者など20名が参加しました。ゲストスピーカーとして場面緘黙で発達障害的傾向をもつひきこもり経験者の大橋伸和さん(写真2)に話題提供をしていただきました。

大橋さん(33)は小学4年生から24歳まで家族以外の人とは話すことができない選択制緘黙で、このころから不登校となり、同じ不登校の子どもたちが多くいる通信制高校を卒業するも卒業後行き場を失い18歳から21歳まで「ひきこもり」だった体験が語られました。

場面緘黙は最近の研究のなかで不安障害の一つとされ、不安をもととくに感じやすい脳機能があることがわかり、大橋さんもそうなのではないか、ということ述べていました。

また場面緘黙が単に学校に行ったときや一歩外に出たとたん言葉が出ないだけでなく緊張のあまり、からだ全体が硬直して身動きがとれなくなる症状を示し、その快復には安心できる仲間とのつながりや自由度の高い柔軟に対応してくれる支援者の存在、そしてハードルを高くしてしまわないためにも途切れのない支援を模索しつないできた家族の役割が大切であり、そうした周囲の理解が大橋さん自身の夢を見失わずに保持することに結びついたのだと思います。自己否定感や不安感を軽減していくためには「ちょっとしたことでも褒められることや認められ任せられ評価される体験」という指摘は人間であればだれでも必要なことではないかと思えます。

さらに大橋さんのお話からは改めて「居住空間と兄弟姉妹との関係」を考えさせられました。兄弟姉妹間で個々の自室をもたない生活

(テレビの共有など)はさまざまなストレスや気遣いが多いことが理解できます。



(写真1) 小樽市総合福祉センター和室で話す大橋伸和さん

前回に引き続き1月25日木曜日「ひきこもりサテライト・カフェ in 小樽④」には雪が降る中参加者は26名、市議会議員や保健所に研修医として配属されている医師も勉強のため参加しました。

今回の話題提供は前回に引き続き、大橋伸

和さんから主に「ひきこもりから社会へ」についてお話をいただきました。ビジネスマンのような社会から要求される能力を自分は果たしているのだろうか?というひきこもり体験者であればよく理解できる「見通しのつかない不安感」の増幅が自分への自信のなさをつくり出してしまうその思いが語られました。

しかしその後つながった作業所やデイケアなどの「行き場」の経験から「世の中で生きるといことはそんなに完璧な人間でなくてもよい」ことを実感、25歳のとき後がないと意を決して大学へ進学しました。ひきこもり期間に読んでいた書物が大学生活で活かされていくこと、また人とうまく雑談できないことを学内の教師や相談員などの資源を活用しながら切り抜けていきます。誰かに話をするができることはとても大切なことで、そこから全国的にも珍しい学内に自助会が結成され今日でも関係を持たれています。

卒業後勤めたNPO事業所ではピアサポーターとしてそこに通所する当事者とかかわることの楽しさを味わいながらも、会計事務作業を一手に任せられ離職せざるを得なくなるプロセスが語られ、その内容からは組織体制の脆弱さ不備という課題もあるように私は思いました。

最後にこれらの経験から障害と健常の狭間に置かれた当事者に対する自己責任論にかかわる課題が述べられました。どんな立派な制度政策を用意してもそこからこぼれ落ちる人たちがいる、という認識を私たちは常にどこかにもっていることが必要ではないだろうか、と改めて私は感じました。

(文/写真:田中 敦)



(写真2) 大橋 伸和さん

第2回中高年ひきこもり当事者のライフプラン学習会 地域おこしは人おこし 講演採録

11月12日曜日、第2回中高年ひきこもりのライフプラン学習会「地域おこしは人おこし」をテーマに岡山県美作市で実践活動に取り組むNPO法人山村エンタープライズ代表の藤井裕也氏（写真）を招いた講演とワークショップを開催。市内近郊から当事者や家族、支援者など30名が集まった。藤井氏の発言内容を採録する（担当理事:吉川修司）。



藤井 裕也氏

大学では考古学を専門に学んできました。もともと就職活動には疑問があり、仲間とともにさまざまな活動や仕事をしている人と大学生が会う場をつくり、仕事や働くことについて理解を深めるようなイベントを企画しました。それは、いろんな経験を踏み活動している地域の人と出会い、語り合う中で働くことを決める場所が必要だと思ったからです。来年で10年目を迎えますが後輩が後を引き継いでくれています。私自身、大学へはあまり通わず地域でいろんな取り組みをしている人のところへ直接出向いて話しを聞いてきました。そこで出会った草刈をしている人との交流をきっかけに自分もやってみたいと思いました。

少子高齢化の時代を迎え、私は中山間地域や離島で活動したい気持ちが強まり23歳の頃、国の事業として実施している「地域おこし協力隊」に入りました。世界的に「田園回帰」で田舎に戻る人が増えていますが日本では増えず、ヨーロッパと比べても20年遅れています。それに加えて日本は世界一高齢化率が高い国です。また日本の中で急激に高齢化が進む地域が岡山県の県北地域でした。その意味で故郷の岡山で協力隊として大きな役割を担えることが自分のやりがいにもなりました。

その後、協力隊OBとともにNPO法人山村エンタープライズを立ち上げました。最初は人口700人、空き家が約200件ある村で活動を開始し、空き家を再生させて単身者向けのシェアハウスをつくり集まった人たちと農作業や山林作業をやりました。その中の一人に4年間ひきこもった青年がいて、畑仕事を2年くらいやった頃から仲間意識が芽生え、アルバイトで稼げるようになり自立していきました。彼が来てから不登校・ひきこもりの当事者や支援者が来るようになったため、「人おこし」という不登校やひきこもり支援に特化した事業を開始しました。それは制度の狭間に置かれているひきこもりのようなグレーな立場の人たちのためにNPOとして活動をすすめるべきだと思ったからです。

ひきこもりの人たちは支援から支援のたらい回し状態におかれる方が多く、地域に戻ることがありません。一方、地域の現状は人手不足で経済が弱体化、住人の高齢化も進んでいます。だからこそ地域の担い手の育成は急務です。そのためには当事者を支援から支援の橋渡しするように扱うのではなく地域に落とし込むことが大事です。仕事や暮らし方や仲間や住まいなど生きる上で必要なことをトータルで考えることが私たちNPOのなすべきことだと思います。

税金や公共事業はそこに住む人の幸せのためにあると思います。行政がつくる制度が悪いという前に私たちが制度をどう活用するかを行政に提案していくべきです。社会的にいろんな仕組みを変えなくてはいけない時代に中国山地の山奥での活動が「フロンティア」だと思っています。

私たちの仲間になりませんか 会員募集をしています

レター・ポスト・フレンド相談ネットワークは若者の範疇に入らない成年・壮年期のひきこもりへの対応に軸足を置きながら、ひきこもり当事者が社会に出たとき、自信や希望を持ちながら歩めるような新しい働き方を、当事者自らが創造しています。

ぜひ多くの方々に、私たちの活動の趣旨を理解していただき、ひきこもり当事者が自信をもって生きていくことのできる、新しい社会のあり方をみなさんとともに追求していきたいと考えています。

正会員	賛助会員	寄付金
入会金 1,000円 年会費 3,000円	入会金 1,000円 年会費 2,000円	一口 1,000円～

入会金、会費納入は、下記郵便振替口座へのお振り込みでお願いします。

●口座記号番号 02700-4-66261 ●加入者名 レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク

旭川・ニこころのピアサポートフォーラム開催

昨年12月16日、旭川市障害者福祉センター・おびつたにて『ニこころのピアサポートフォーラム2017 in 旭川「ひきこもり」ってなあに?』が開催され、旭川のひきこもり当事者会「NAGG」の参加者で当団体会員の

植西あすみ氏、旭川の家族会「そよ風の会」代表・NAGG世話人の内島貞雄氏、当団体の武田俊基理事の3名が登壇した。

このフォーラムは当事者、支援者、精神疾患の有無といった垣根を越えた居場所づくり・仲間づくり・地域づくりを目指して企画されたもので、第一部「知ろう!当事者の話・当事者会の話」では、登壇者によるトークセッションが行われた。

小説「ムーミン」に倣い、冬は冬眠の期間として休憩につとめるライフスタイルの実践や、浦河へてるの家方式の当事者研究への取り組みで秋冬型うつから回復、当団体主催「ひきこもり大学・旭川校」への参加を機に当事者活動に関心を持ちNAGGへの参加に至った植西氏、不登校がテーマの講演会の開催をきっかけに、そよ風の会の前身、不登校の家族会「そよ風ネット

ワーク」を設立、当NPOが旭川市で行ってきたNPO事業への協力を経て当事者会・NAGGを開始した内島氏、SANGGOの会設立時から同会への参加を重ねたことで当NPOの理事就任に至り、札幌の家族会「KHJはまなす」やNAGGの運営に参画している武田理事とそれぞれの立場でこれまでの経緯を述べた。

当事者会については「悩みや不安などの重荷を一旦降ろし、楽になれる場所」「先を進む当事者との出会いを契機に自身の活動範囲が広がってゆく当事者もみられ、当事者がエンパワメントされる可能性を有する場所」という意見が出された。またNAGGでは当事者が楽しみながら参加できる取り組みとして、花見、映画鑑賞、新年会などを行ってきたことが紹介された。

第2部「かたろう!つながろう!」はグループワークを行い、当事者やその家族、支援者など、フォーラムの趣旨と同様に垣根を越えて多様な参加者たちが集い対話を行った。

当日はNAGGの参加者も訪れ、ひきこもり新聞の販売も行われた。植西氏が手製のハーブティーとお菓子を用意し、普段のNAGGを意識した居心地の良さが演出され、雰囲気や場づくりという面にまで配慮がなされたフォーラムだった。



御 礼

インターネットオークションを活用した在宅ワークの取り組みにご賛同いただき、ありがとうございます。右の写真は「小樽不登校ひきこもり家族交流会」のみなさまから寄贈いただいた物です。昨年6月から寄贈いただいた物品により総額5万円を越すものとなりました。本在宅ワークの詳細は3月中にリーフレットにまとめ電子書籍として発行します。



成果物発行のお知らせ

「当事者から捉えるひきこもり回復後における就労定着促進 調査研究事業 報告書」A4判全48頁予定
個別インタビュー調査研究や昨年10月に開催されたフォーラム「ピアと織りなすチカラとともに働き合うジョブサポート」を中心にまとめられています。希望者には郵送料手数料一冊500円で頒布します。

皆様からの投稿をお待ちしています

〒064-0824 札幌市中央区北4条西26丁目3-2

「NPO法人 レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク」事務局 通信編集部 宛

e-mail ; info@letter-post.com

水鏡に、つゆ玉ひとつ⑤ 小西恵司

『いただきますー!』

両親が別居することとなり、私は母親と住んでいます。別れて生活をはじめるとの出来事は、辛い経験の連続となりましたが、何とか収まるころへ収まりました。母が昔、こんな話をしました…、あいさつするのは気持ち悪いからやめると父から言われた、と。そんなことを平然と言つ父に従い続けてきた長い歴史に、とうとうピリオドを打つ時がきた、と私はそう思っていました。しかし母は、新たな生活がスタートしたにも関わらず、ふて腐れた顔をして文句や愚痴ばかりを言っている、とあいさつを交わそうともしない…。当時、母は家族を立て直す気がなかったことは、私にはハッキリと分かりました。

「これでは今までの暮らし方と同じだ…。」引越してまもなく、私にそんな危機感が走ったのを今でも憶えています。だからこそ、やり続けようと思ったことが「あいさつ」です。働いたお金を納めてゆくのとはちろんですが、あいさつは仕事で疲れていてもやり続けました。

『いただきます。ごちそうさま。』
 いただきます。ただいま。』たった

⑤ 小西恵司

四つのあいさつですが、どちらかというと言いやすいあいさつです。当初は案の定、私が食事のときに「いただきます!」と言っても、母は不貞腐れて何も言いませんでした。母が返答するまで声を徐々に大きくして「いただきます!」と当てつけるように連呼し続けました。ようやく母が呆れ声で「はい…」と言ひ、食事をする毎日です。それ以外のあいさつも、しつこくやり続けました。

正直疲れましたが、やってよかったと思います。今では時折ぬけることがあっても、自然とまたあいさつを交わせるようになったのは、とても嬉しい成果です。でも、ここまでくるのに数年かかっています。単純なことなのに、長い道のりです…。

『五分五分』

この話で伝えたいことは二つあります。一つ目は、人間同士で起こした出来事は五分五分で考えることです。誰であっても、どんな出来事があっても、百パーセント、他人もしくは自分だけが悪いことなどありません。裁判で白黒つけることはあるにせよ、本質的に見れば「五分五分」だからです。以前も書いたように、人間関係は双方の関係で成立しています。出会いか

ら今現在に至るまでを映画のようにふり返り、誤魔化さず感情ぬきにトータルで換算できれば、不思議と五分五分だな、と思えるはずですよ。

しかし、それぞれ個々人の言い分と感情が暴走すると、相手が悪いと思える要素を盛って自分を完全なる被害者へ仕立てるはずですよ。そのズルさを暴走させる間は、五分五分だとは決して思えません。自分自身を必要以上に落として責める自己卑下も、逆のパターンではあります。同様のことです。

誰でも未熟な部分がありますから、愚痴や不幸話を吐くことは必要です。しかし、自分の抱える現実へ手をつけられない限りは何も変わりません。神や仏に祈っても、魔法は起こりません。その変化の無さに虚しさを感じて、また更に被害者ヅラをしては愚痴る…。ついに他人の心も蝕む疫病神へ成り下がります。被害者意識を強くしすぎても、自分を卑下しすぎても、傷は深くなるだけです。

『今、できることをしよう』

二つ目は、自分や他人の失敗を許しつつ、今できることをしてみることで。自分で動いた瞬間、他人に依存せず過度の期待もしない、という自分の姿勢へ直結します。親も子もそれぞれが主体的に判断して動いていると分かれば、例え失敗しても、いつかはお互いの失敗を許しあえるはずですよ。なぜ

許せるかという点、自分もその失敗にどこか覚えがあるのと、自分で選んで行動する充実さも、もはや共に知っているからです。

私は今まで、数々の挫折や失敗を繰り返してきました。だからこそ、深く理解できたことがたくさんあります。世間からは、愚か者、汚点だらけ、最低な人間、と罵られるかも知れませんが、それらすべてが私の人生における財産です。偉そうな言い方なのは承知していますが、経験したことがこうして文章で伝えられること自体、私の経験は無駄ではなかった、と思えます。明日への活力になり、ありがたいことです。

『小さな積み重ね』

自分を変える時は何かテカイことをする、そうしなければ…、と意気込んでいる人が多いかと思いますが、欲張るとその分、負担は大きくなります。私が行なった「あいさつ」は、定着させるまでに年単位かかっています。

それに、例えあいさつという小さな行ないであっても、できなかった過去と今を比べると、私と母の間に漂う空気感は全然違います。昔から食べている同じ食べ物や並ぶ食卓であっても、今現在のほうがホッとさせる食卓だな、と思えます。そんなひとときは、小さな行ないの積み重ねで実現できるので

◆「SANGOの会」例会のご案内

2018年3月は下記日程にて行います。初めての方も参加できます。概ね35歳前後のひきこもり当事者や経験者で、人との関係や会話に慣れたいと思っている方、またいろいろな情報を得たいと考えている方は、いらしてください。詳細は事務局までお問い合わせください。初めて参加される方で、少人数で会うことを希望される方は、事前に事務局までメール、電話で問い合わせのうえ初心者の例会にお越しください。

《通常例会》

と き：3月14日(水) 午後1時30分から午後3時30分まで

会 場：札幌市社会福祉総合センター4階 ボランティア研修室B

場 所：札幌市中央区大通西19丁目

(地下鉄西18丁目駅下車徒歩5分)

3月の初心者例会はインフルエンザ予防のためお休みします。



◆北広島市でひきこもりフォーラム開催のご案内

ひきこもりから脱した方の体験発表、当事者との関わり方のポイントを聞くことができます。

講 師：北海道ひきこもり成年相談センター、レター・ポスト・フレンド
相談ネットワーク

と き：3月17日(土) 午後1時30分から午後3時30分まで

会 場：北広島市芸術文化ホール活動室1・2 / 場 所：北広島市中央6丁目2-1

参加方法：3月13日(火)までに北広島市役所福祉課へ(電話)011-372-3311

◆第6回ぼかぼかハートのつどい 講演会 開催のお知らせ

ひきこもり人たちの思いとともに感じて積み重ねてきたこと、札幌の当事者会の経験を旭川につなぎ、旭川の当事者会ができたことなどを話してもらいます。

登壇者：内島貞雄氏(旭川そよ風の会)、植西あすみ氏(鷹栖町在住)、当NPO 田中敦理事長

と き：3月18日(日) 午後1時30分から午後3時30分まで

会 場：サンホールはびねす1階いきがいホール / 場 所：鷹栖町南1条3丁目2-1

参加費：100円(ハーブティーと鷹栖の豆のお菓子付)

お問い合わせ：ぼかぼかハートのつどい事務局(電話)0166-87-2895

◆「ひきこもりサテライト・カフェ in 小樽◎」開催のご案内

高齢化するひきこもり当事者や家族を地域で支えていくため当NPOが小樽に出向き居場所づくりをすすめています。みなさんとともに好きな飲み物やお菓子を食べながら話し合しましょう。

と き：3月22日(木) 午後2時から午後4時まで

会 場：小樽市総合福祉センター4階和室 / 場 所：小樽市花園2丁目12-1

参加対象：ひきこもり当事者及びその家族 / 参加費：無料 ※事前申し込み不要

後援：小樽市

☆ 編集後記 ☆

今年度のまとめの作業をすすめています。当事者から学ぶことも多いですが、ある当事者は「間違えること、負けること、人は敗北でしか学べないということ。それができないと被害者意識が加害者意識になり気づかないまま加害者になってしまう。これは敗北から学べなかった人の結末である」という指摘が心に残ります。他人に怒りをぶつけても自分の現実は何も変わらないということだと思います。

(発行責任者 理事長 田中 敦)

無 断 複 製 は お や め く だ さ い